



令和4年度 東京都北区立堀船中学校

# 堀船中だより

令和5年3月 第12号

校長 阿久津 光生

〒114-0004

東京都北区堀船 2-23-20

Tel 03-3911-8817

北区教育ビジョン 2020 の人間村長の精神を基調とし、  
心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標

**自ら学び 自ら考え 自ら行動できる生徒**

## 《1年生 校外学習「TOKYO GLOBAL GATEWAY」に行ってきました》

2月1日(水)、1年生は校外学習で「TOKYO GLOBAL GATEWAY」(TGG)に行ってきました。

TGGは、お台場にある英語を活用した体験型学習施設で、グローバル化が進む中で不可欠な英語を学ぶためにはうってつけの場所です。教室の外に出て、コミュニケーションツールとしての英語に触れることで、世界中の多様な人々が繋がる「ワクワク」する体験ができました。

行き帰りのマナーもとっても良くて感心しました。全てのアトラクションに一生懸命取り組んでいる姿がとても素晴らしかったです。



## 《2年生 横浜校外学習に行ってきました》

2月3日(金)、2年生は横浜校外学習に行ってきました。

上中里駅→横浜駅・桜木町駅・石川町駅から、横浜市内を班行動で回りました。開国以来の幕末の動乱期から明治・大正・昭和と海外交流の中心となった横浜では、外国の影響を受けた異国情緒あふれる文化や歴史を感じることができます。2年生は、横浜の名所を調べたり、時間をかけて、事前学習や準備を進めてきました。その甲斐あって、魅力いっぱいの横浜の街を満喫できました。



## 《令和4年度 北区特別支援学級 卒業生を送る会が行われました》

2月16日(木)午前9時より、特別支援学級卒業生を送る会が、北とびあさくらホールで開催されました。本校3組の卒業生のみなさん、それぞれ進路も決定して、もうすぐ卒業ですね。ご卒業おめでとうございます。小学校・中学校課程の修了の喜びを分かち合い、新たな進路への励みとなったこの日。思い出に残る卒業生を送る会となりました。

3年生は、小林PTA会長からきれいな花束をいただきました。本当にありがとうございました。



## 《祝 第72回 東京都公立学校 美術展 出品された皆さん、おめでとうございます》

第72回 東京都公立学校 美術展覧会が、令和5年2月14日(火)から2月19日(日)まで、上野の東京都美術館で開催されました。

優れた作品として選ばれ、会場に展示されたみなさん、本当におめでとうございます。

【技術】1年生 阿部さん

【家庭】2年生 木村(綺)さん・3年生 石井さん、小池さん

【書写】1年生 小林(紗)さん・3年 小池さん

【美術】3年生 刈屋さん・佐藤(麗)さん・石井さん・林(欣)さん

## 《祝 3年 佐藤(颯)さん、東京都北区子どもかがやき顕彰(北区かがやき賞)受賞が決定しました。おめでとうございます》

佐藤(颯)さんは、全国中学生都道府県対抗野球大会で全国3位となった3年の佐藤(颯)さんが、東京都北区子どもかがやき顕彰(北区かがやき賞)受賞が決定しました。おめでとうございます。佐藤(颯)さんは、全国中学生都道府県対抗野球大会で全国3位となったオール東東京のキャプテンとして出場し、活躍しました。かがやき賞は、全国でトップクラスの成績をおさめた人たちにおくられる大変名誉ある賞です。受賞式は、3月17日で卒業式の前日となるため、決定を受けてお祝い申し上げます。高校でも、ますます活躍されることを期待しています。

## 《Welcome to Horifuna Junior High School.》

2月15日(水)、アメリカ合衆国カリフォルニア州ウォルナットクリーク市にあるセブンヒルズスクール(SHS)の生徒のみなさん12名、先生方2名が堀船中に来てくれました。ようこそ堀船中へ!

### ◎1 校時 体育館での歓迎会



ウェルカムボード



ウェルカムスピーチ(英語)



セブンヒルズスクール代表生徒のあいさつ



ウェルカムボードの披露



大江戸ダンス隊のダンス



(SHS) 代表生徒 ピアノ演奏

### ◎2 校時 浮世絵の擦りの実演・体験体験(伝統木版画 摺師 沼辺様より御指導)



### ◎3、4 校時 2年生との交流



堀船中全校生徒の心温まるおもてなしに、セブンヒルズスクールの皆さんはとっても喜んでくれました。海外派遣代表生徒のみなさん、生徒会本部役員・2年生学級代表委員のみなさん、大江戸ダンス隊のみなさん、2年生のみなさん、メッセージカード作成に携わってくださった皆さん、お土産を御用意してくださった小林PTA会長さん、本当にありがとうございました。

堀船中は、小さな学校で設備も古いですが、教職員と生徒とPTAのみなさんが一体となり、お客様を温かくお迎えできたことにとても感激いたしました。改めて、全ての皆様に感謝申し上げます。



## 北里柴三郎に学んだ優れた研究者（4）～野口英世～

野口英世は、1876(明治9)年、福島県会津の猪苗代町の貧しい農家に生まれました。幼い頃、母が小川に洗いものに行っている間に囲炉裏に落ちて大やけどをしてしまい、握った状態の左手の指がくっついて動かなくなっていました。そんな子を不憫に思った母は、貧しい生活でしたが、英世を学校に行かせてくれました。英世も学校で一生懸命勉強しました。ある時、英世は自身の左手のことや将来の不安について作文を書きました。それを読んだ先生や生徒が協力してお金を出し合い、固まった指を五本に切り離す手術を受けさせてくれたことで、英世の指は動くようになりました。

猪苗代高等小学校を卒業した英世は、医師になって恩返しをしようと決意します。福島県の医術開業試験の受験資格を得るために、渡部鼎という外科医が会津若松で開業する医院に住み込みで働き始めると、独学で受験勉強にも励みました。1896(明治29)年9月、英世は医術開業試験を受験するために福島から上京します。同年10月、医術開業前期試験に見事合格すると、翌年の医術開業後期試験に備えて、医術開業試験の予備校として湯島の済生学舎に学びました。そして1897(明治30)年10月の後期試験に合格し、晴れて医師免許を取得すると、順天堂医院の雑誌編集の職を得て勤務しました。



野口 英世 博士

【提供】公益財団法人野口英世記念会

ある日、英世が雑誌分類作業をしていた時、北里柴三郎が主宰する細菌学雑誌に発表された論文にあった「世界初の赤痢菌発見」という文字に目が止まりました。手に取って読んでみると、驚いたことに、この画期的な研究を発表したのは、志賀潔という名前の伝染病研究所の助手であることが分かりました。英世と同じ助手の身でありながら世界的な業績を挙げた志賀潔の存在が、英世の研究者魂に火をつけたのです。英世は志賀が助手を務める伝染病研究所に憧れを抱き、北里が率いる伝染病研究所への入所を志願すると、助手見習いとなります。英世は、大学はおろか高等学校さえ出ていません。そんな英世の抜擢には、東京大学医学部を頂点とする学閥社会を批判する北里の、学歴や血縁を重視するこれまでの社会通念にとらわれない能力主義に基づく人材活用の考え方がよく現れています。1899(明治32)年4月には、野口は助手見習いから、正式に助手になりました。ちょうどその頃、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学の病理学教授サイモン・フレクスナー一行が、フィリピンのマニラに駐留するアメリカ陸軍兵士の間に蔓延した赤痢の調査に赴く途中、わざわざ日本に立ち寄りました。その理由は、赤痢菌を発見した伝染病研究所の志賀潔と、その指導をした北里所長を表敬訪問し、2人から赤痢菌の研究状況を学びたかったからでした。北里は、このフレクスナー教授の依頼を快諾しました。英世は入所当初から「アメリカで研究をしたい」と周囲に公言していました。そのことを伝え聞いていた北里は、フレクスナー教授が伝染病研究所内を視察する際の通訳係として英語が堪能な英世を抜擢し、英世にフレクスナー教授の知見を得る機会を与えたのです。事実、それが縁となって、英世は翌年、ペンシルベニア大学に移籍したフレクスナー教授の下で研究をすることになります。

英世が手がけた最初の大きな仕事は、横浜開港検疫所の医官補となり日本で行ったペストの水際対策でした。1899(明治32)年6月、東洋汽船の大型客船「亜米利加丸」の船内で原因不明の伝染病が発生し、船は横浜港に入港しました。英世は、直ちに船に乗り込むと、患者を診察します。その結果、ペストの可能性が高いと診断し、患者から採取した血液と排泄物からペスト菌を確認しました。英世の的確な診断と迅速な隔離が、日本でのペスト流行を食い止めたのです。その後、中国でもペストが流行したため、英世も派遣されると、現地の医療活動に大いに貢献しました。

中国から帰国後、英世は北里に「アメリカのフレクスナー教授の下で学びたい」と兼ねてからの希望を伝えました。北里は英世の希望に応じて、フレクスナー教授に「野口を助手として使って欲しい」という内容の紹介文を書きました。それを受けて英世は、1900(明治33)年12月、北里がフレクスナー教授宛にしたための紹介状だけを頼りに、横浜港から一路アメリカサンフランシスコに向かいました。この時、ペンシルベニア大学医学部では、新たな助手を

雇用する予定はありませんでした。しかし、高名な北里の推薦状と、フレクスナーの温情溢れる人柄が幸いし、英世はフレクスナー教授の私設の助手になることが許されたのです。

フレクスナー教授から英世に与えられた研究テーマは、毒蛇でした。フレクスナーと英世は、共同で「蛇毒の研究について」と題する研究を發表し、英世は發表の際に行われた公開実験(デモンストレーション)の助手を務めます。正にこの時、「野口英世」という名前が世界の研究者の耳目を集めた最初の瞬間でした。その後、英世は梅毒スピロヘータの研究に本格的に取り組めます。英世は次々と画期的な新発見を發表すると、「魔法の手を持つ男」としてその名声が世界中で響き渡ることになりました。そうして1914(大正3)年と1915(大正4)年と1920(大正9)年と、なんと3度に渡ってノーベル賞生理学・医学賞の候補に上がる偉業を果たしたのです。

その後、英世は黄熱病の研究に精力的に取り組みました。黄熱病は、ネッタイシマカによって媒介される黄熱ウイルスを病原体とする、熱帯アフリカならびに中南米の感染症です。黄熱病に感染すると、4、5日の潜伏期間のうちに突然発熱し、頭痛、嘔吐、下痢などを発症します。さらに悪化すると、吐血、黄疸などを引き起こし、4～5割が死亡してしまいます。英世はこの黄熱病の原因究明のために、1918(大正7)年に南米エクアドル、1927(昭和2)年には西アフリカ黄金海岸(現在のガーナ共和国)に赴き、感染地で黄熱病の研究に没頭しました。そして、研究の最中の1928(昭和3)年5月21日に、黄金海岸のギニア湾を臨むアクア市で黄熱病に罹患し、帰らぬ人となりました。

日本の千円札の肖像画となった、北里柴三郎と野口英世。同時代に生きた偉大な細菌学者は、互いに認め合い、尊敬の念を抱きながらも、対照的な生き方を選択しました。日本に恩返しをするためにドイツから帰国し、我が国の感染症学の発展と後進の研究者の育成に尽力した北里。対して、北里の推薦状を頼りに単身渡米し、世界各地に雄飛して感染症と闘い続けた英世。信念を持ってそれぞれの人生を切り拓いていった2人の歩みが、多くの人命を救う道となり、今なお日本と世界の医学界を導き続けているのです。